

金井先生に倣いて

木塚 隆志

17年前、宗教学研究室に入学して以来、私は、キリスト教思想やドイツの宗教改革史を研究してきたが、ここ数年、ようやく、宗教学に正面から取り組みたいと思うようになった。なぜ、こういった個人的なことから始めたかという、こう思うようになったのは、どうやら、金井先生の影響によるところが大きいと思うからである。もちろん、先生が直接、宗教学の重要性を私に説かれたことはなかった。私が修士課程の時は、半年に1度か2度、先生が院生に個別指導をしてくださっていたが、こういった面談の際にもそういったことはおっしゃらなかったし、また、留学前に食事に誘っていただいた際や、その他の宴会の席などでも同様であった。しかし、気がついてみると、いつの間にか先生の後を追って、宗教学を目指すようになったのである。これは、恐らく、スイスのキリスト教社会主義運動の研究からウェーバーの宗教社会学を経て宗教現象学へという先生の研究の道筋が、研究分野の近い私に、自ずと模範として受け取られたためでもあろうし、また、先生が宗教学に取り組まれる際の研究スタイル、つまり、いわゆる流行りの言説に惑わされることなく、従来の理論の慎重な検討と批判に基づいて考察を進めていかれ

るその手法—それは、先生のウェーバー研究でも同様であると思う—が、私にとって非常に共感の持てるものであったことにもよると思われる。まさに、子供が父親の背中を見て育つように、私は指導教官たる先生の背中を見て育ったといったところだろうか。

また、先生からのこういった影響に関して、もう1つ、思い出されることがある。それは、修士課程に入学した当時から私が先生に対して抱いていた、はなはだ勝手な親近感である。これは、先程も触れたように、私の研究テーマが先生のご専門と非常に近いが故のものでもあったが、私にとってより重要であったのは、先生も私も他学の出身であるという点であった。もっとも、いくつかの大学や大学院を経て宗教学研究室に來られた先生と、早稲田の学部を出ただけであった私とでは、その意味や重みが違うのは当然であるが、しかし、当時の私は、同じく、宗教学研究室に外からやってきた、いわば「よそ者」としての親近感を先生に抱いていたのである。もちろん、これは、私の、まさにまったく勝手な思いであって、先生や当時の研究室の方々がそのような見方をしておられたということではないので、誤解しないでいただきたい。

そして、当時、私のこの「よそ者」意識は、また、宗教学それ自体の問題領域に係わることに對して非常に消極的な研究姿勢と結びついていたが、しかし、今、それ以来の経緯を振り返ってみると、私は、同じ「よそ者」としての親近感を抱く先生の背中に宗教学への取り組みの模範を見ながら歩んできたことで、次第にこういった姿勢から脱却するに至ったのだと思うのである。

しかし、思えば、私は、このはなはだ勝手に一方的な親近感によって、ずいぶん、先生に無礼な、そして、「先生には説明しなくてもわかってもらえるだろう」という甘えた態度をとってしまった。これは、日常の授業のみならず、研究においても同様であって、しばしば、先生に論の進め方の強引さと乱暴さを指摘されたことがあった。また、こういった性格は、私の論文中での言葉遣いにも表れたようで、私が、確か、修士論文の草稿を先生にお見せして指導を受けた折、先生が、私が訳したミュンツァーの書簡を見て、「ミュンツァーがこんな乱暴なものの言い方をするのだろうか？」と訝っておっしゃられたのを記憶している。しかし、最大の無礼は、修士論文に取り組んでいた段階において、まだ、先生の著作を読んでいなかったことであった。やはり修士論文についての面談の時だっ

たと思うが、キリスト教思想の基本的な理解に欠けるところのある私に、先生は、何冊かの文献とともに先生ご自身の著作『「神の国」思想の現代的展開』を紹介してくださった。それを読んで私は、自分の無知と愚かさに愕然とした。そこには先生の研究のエッセンスと思われるもの—私は、先生のこの著作の、特に第3部には、先生の現在までのご研究全体を動機付けるエッセンスがあると思う—があった。そして、それは同時に私の修士論文に対しても非常に重要な視点を与えるものであった。勝手な親近感を抱いて馴れ馴れしい態度をとりながら、師の研究を知らない。これ以上愚かで無礼な弟子はこれまでいなかったのではないだろうか。しかし、このような数々の非礼にもかかわらず、この愚かな弟子を、修士論文、留学、博士論文、その出版と、その都度、それぞれの状況に対する最も適切なご指導によって導いてくださった先生には、誠に感謝の念の尽きることはない。この場を借りて心よりお礼申し上げたい。

私は、ようやく、宗教学を目指して歩み出そうとしているが、その行き先は、まだ見当のつかない状況である。先生が、これからも、私に、否、宗教学を志す多くの者に、その背中を見せて歩んでくださるよう切に希望するものである。